

〔論 文〕

## 高齢者の友人関係

—友人関係機能，友人関係満足度と主観的幸福感との関連—

山岡もも・松永しのぶ

Friendship among Elderly People: The relationships among functions of friendship, degree of satisfaction with friendship and subjective well-being

Momo YAMAOKA and Shinobu MATSUNAGA

This study investigates characteristics of friendship among elderly people, particularly the relationships between the functions of friendship, the degree of satisfaction with friendship, and subjective well-being. Written questionnaires completed by 241 elderly people aged between 60 and 88 (92 men, mean age 72.03 years; 149 women, mean age 72.11 years) were analyzed. Among men, the duration of friendship was longer than among women. The most common initial acquaintance among men were co-workers, followed by schoolmates and old playmates, while friends made through leisure and volunteer activities or in the neighborhood were more common for women. Factor analysis revealed the following two factors: “trust and support”, and “companionship.” Among both men and women, the degree of satisfaction with friendship was positively correlated with subjective well-being, and the study suggested that the level of “trust and support” influenced the degree of satisfaction with friendship.

*Key words:* elderly people (高齢者), friendship (友人関係), functions of friendship (友人関係機能), degree of satisfaction with friendship (友人関係満足度), subjective well-being (主観的幸福感)

### 問題と目的

この半世紀で日本人の平均寿命は大幅に伸び、健康寿命（日常生活に制限のない期間）も現在では男女ともに70歳を越えている（内閣府，2012）。2011年に日本の65歳以上の高齢者人口は過去最高の2,975万人となり、高齢化率は23.3%に上昇し、日本は「世界のどの国も経験したことのない高齢社会を迎えている」（内閣府，2012）。今日、高齢期の人々の心豊かな生活を考えることは、個人にとっても社会にとっても重要なテーマとなっており、心理学の分野でも、生涯発達の様式からこの時期の心理社会的変化を成熟や発達の観点からとらえ直すとする研究が盛んになっている。

高齢者の心理的適応については、主観的幸福感などの操作的指標を用いて関連要因を探る研究が数多

く行われてきた（古谷野，2003）。高齢者の主観的幸福感について繰り返し確かめられている関連要因は、健康度，社会経済的地位，家族（配偶者と子どもの有無）であり，身体的に健康で，経済的に安定し，配偶者や子どもがいる人ほど主観的幸福感が高いことが一貫して示されている（藺牟田，2008；古谷野，2003；佐藤，2007）。ただし，家族以外の他者との関係については，対象と測定方法により結果が異なっていることが指摘されている（古谷野，2003）。

高齢期の人間関係に関する研究の動向をまとめた古谷野（2008），野邊・大須賀（2010）によると，日本においては，高齢者の人間関係に関する研究は，主に家族関係を中心に進められ，その後，家族以外の身近な他者との関係も視野に入れた研究へと発展してきた。しかし，友人関係を中心にした研究はきわめて少なく，今後の課題であるとしている。友人

関係についての研究は、青年期までを対象にしたものは数多くあるが、高齢期の実態については、明らかでない点が多い(菅原, 2007)。ライフスタイルや家族のあり方の多様化, 高齢期の伸長などの影響を受け, ひとり暮らしの高齢者が増加している(内閣府, 2012)。高齢期の生活や心理的適応に, 友人など家族以外の他者との関係性が果たす役割の重要性は, 今後ますます大きくなるであろう。

そこで, 本研究の第一の目的は, 高齢者がどのような友人関係を築き, どのような機能を有しているのかを明らかにすることである。

高齢者の人間関係の機能的側面については, ソーシャル・サポートの観点から, 主に情緒的サポートと手段的サポートの授受について, 家族とそれ以外の他者との比較検討を行った研究が数多く蓄積されている。これらの研究成果によれば, 高齢者にとっては配偶者や子どもといった家族が重要なサポート源であり, 家族は情緒的, 手段的サポート双方のサポート源になっており(浅川・古谷野・安藤・児玉, 1999; 平野, 1998; 西村・石橋・山田・古谷野, 2000; 野邊, 2005), 特に配偶者がいる場合には, 男性は女性に比べて配偶者を最も重要なサポート源として選択する割合が高いことが報告されている(小林・杉原・深谷・秋山・Liang, 2005; 西村他, 2000)。一方, 家族以外の他者については, 「友人・知人」(西村他, 2000), 「友人」, 「近所の人」(小林他, 2005), 「近隣者と知人」(野邊, 2005) など研究によって設定やカテゴリーが異なるが, いずれにおいても家族以外の親しい他者は, 情緒的サポートの提供源として高齢者に認識されており, 高齢者の生活を支える重要な位置を占めていることが明らかになっている。

友人関係の機能的側面に着目して, 高齢者の友人関係について検討した研究は数少ない。Connidis and Davies (1992) は, 高齢期における親しい関係の機能を「Companions」と「Confidants」の2つに分類している。「Companions」を余暇活動や同伴行動などでの交遊相手, 「Confidants」を信頼や相談の対象と定義し, 家族と友人におけるこの2つの機能の違いについて調べている。西村他(2000)はこの分類に基づき, 「Confidants」については,

「相談」(“気軽にちょっとしたことを相談し合える人”)と「信頼」(“大事なことを頼んだり, 頼まれたりする人”), 「Companions」については「交遊」(“ふだん, 一緒に趣味などの活動をしたり, 余暇を過ごす人”)の3つの項目を設定し, これら3項目の対象として選択された他者を続柄別に分類した。その結果, 「交遊」は非親族である友人・知人が選択されることが多かったのに対して, 「信頼」と「相談」は配偶者や子どもが選択されることが多かった。また, Allan (1989 仲村他訳 1993) は友人関係の機能には, ともに時を過ごし, ともに何かをし, 共通に関心のある問題をめぐって議論し合う「交際・連れあい」, 道徳的・情緒的, 実生活, 物質面でのサポートである「サポート」, お互いのアイデンティティを強め, 形づくることである「アイデンティティ保持」の3つがあると論じている。前田(2004)は, この3つの機能を参考に7つの項目を作成し, 55歳から69歳の男女331名への調査結果から, 友人関係が形成された社会的文脈と交際期間およびこれらが友人関係の機能におよぼす影響の性差について検討した。その結果, 出会いの文脈は女性の方が多様であり, 交際期間は男性の方が長いこと, 男性は主な機能を仕事を通じて出会った友人関係から引き出しているのに対し, 女性は機能の内容に応じて様々な文脈から機能を引き出していること, 男性では交際期間が長くなるほど情緒的機能を果たしていることを明らかにした。これらの研究は, いずれも老年社会学分野での研究であり, 友人や親しい人との関係機能をみるための項目はそれぞれの機能について単項目で問うものが多く, また, それぞれの機能と高齢者の心理的適応との関連については検討されていない。

高齢者の友人関係に焦点をあて, 心理的適応との関連をみた研究は, わずかしかない。丹野(2010)は178名の60歳以上の高齢者に“ふだんからよく会う親密な友人; high interaction (以下, HI) 友人”と“めったに会えない親密な友人; low interaction (以下, LI) 友人”を想定してもらい, それぞれの友人との関係について, 大学生を対象にして作成した「友人関係機能成分尺度」(丹野・松井, 2006)の9下位尺度のうち6下位尺度を実施し, 高齢者用

QOL (QILS-E) との関連を検討している。その結果、HI 友人と LI 友人との関係に共通していたのは、友人関係機能の「自己開示」が友人との「関係満足度」を媒介して QILS-E の「日常の安心感」を促進していたことであった。和田 (2012) は、59 歳から 84 歳の 714 名の高齢者を対象に同性との友人関係における現実と期待する友人との関係性のズレと主観的幸福感との関連を調べている。友人との関係性 12 項目を因子分析した結果、誠実さ、関係維持、気楽さ等の項目から成る「気楽な関係」と共行動、自己向上、協力等の項目から成る「有用な関係」の 2 因子が抽出され、女性は、現実の友人関係、期待する友人関係ともに男性と比べ「気楽な関係」、「有用な関係」の両方が高かった。また、現実の関係がより「気楽な関係」にある人、より「有用な関係」にある人の方が主観的幸福感が高いことが示された。

本研究の第二の目的は、高齢者の友人関係と主観的幸福感との関連を調べることである。上述の研究結果から、良好な友人関係を築いている人、すなわち友人関係に満足している人ほど、主観的幸福感が高いことが予測されるが、本研究ではさらに、友人関係のどのような機能が友人関係の満足度に影響しているのかについて検討する。

以上、本研究の目的をまとめると、第一に高齢者が築いている友人関係の特徴を明らかにすることである。友人の基本属性や交際年数、知り合ったきっかけ、交流頻度、会話の内容などから、その特徴を明らかにし、また、友人との関係にはどのような機能があるのか、その内容について検討する。第二の目的は、高齢者の友人関係機能および友人関係の満足度と主観的幸福感との関連を検討することである。さらに、これまでの先行研究から、高齢者の友人関係には性差があることが推察されるため、本研究においても友人関係の性差について検討する。

## 方 法

### 1. 調査協力者および手続き

本研究では、60 歳以上の男女 299 名に無記名の個別自記式質問紙調査を実施し、265 名から回答が

得られた (回収率 88.6%)。関東および西日本在住の著者の知人または都内 2 区の社会福祉協議会を通して調査を依頼し、許可が得られた個人や高齢者の趣味のサークル団体に直接または郵送にて質問紙を配付、回収した。調査時期は、2009 年 8 月から 11 月上旬であった。

## 2. 調査内容

今回の調査において使用する高齢期の友人関係についての調査項目を作成するために、2009 年 7 月に 65 歳から 86 歳の 14 名 (男性 5 名、女性 9 名) に無記名個別自記式の質問紙による予備調査を行い、下記の友人関係に関する質問項目を作成した。

### (1) 調査協力者の基本属性

年齢、性別、就労状況、家族構成、現在の暮らし向きについて尋ねた。就労状況については、現在の就労の有無と、現在就労していない場合には過去の就労状況として「ずっと仕事を続けてきた」(以下、「継続して就労」)、「一時仕事から離れて再就職した」(以下、「再就職」)、「ずっと専業主婦 (無職) だった」(以下、「専業主婦 (無職)」) のうち一番近いものを選択してもらった。家族構成については、配偶者、子どもの有無と子どもがいる場合には人数を尋ねた。さらに同居者の有無と同居者との間柄について「配偶者」、「父」、「母」、「義父」、「義母」、「息子」、「娘」、「孫」、「息子の配偶者 (嫁)」、「娘の配偶者 (婿)」、「その他」からあてはまるものをすべて選択してもらった。現在の暮らし向きについては、「苦しい」から「ゆとりがある」までの 5 件法で回答してもらった。

### (2) 現在の健康状態と日常生活動作能力

(Activity of daily living; ADL)

現在の健康状態について、「非常に悪い」から「非常によい」までの 5 件法で回答を求め、ADL については、古谷野・柴田・中里・芳賀・須山 (1987) が作成した老研式活動能力指標を使用した。この指標は 13 項目から成り「はい」(1 点)、「いいえ」(0 点) で回答を求め、それらを加算し合計得点 (以下、ADL 得点) を算出する。ADL 得点は 13 点満点であり、得点が高いほど活動能力が高いことを表す。

### (3) 主観的幸福感

前田・浅野・谷口(1979)によって日本語に翻訳されたLawton(1975)の改訂版PGCモラル・スケール(The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale)を使用した。改訂版PGCモラル・スケールは17項目で構成されており、2つの選択肢のうち肯定的な選択肢が選ばれた場合に1点とし、それを加算して合計得点(以下、主観的幸福感得点)を出す。主観的幸福感得点の最高得点は17点であり、得点が高いほど主観的幸福感が高いことを表す。

### (4) 友人関係について

一番親しいと感じている友人を一人想定してもらい、その友人の年齢、性別、交際期間、知り合ったきっかけ(予備調査からまとめた「幼少の頃からの幼なじみ」(以下、「幼なじみ」)、「学校が同じ」(以下、「学校」)、「職場、仕事のつきあいを通して」(以下、「職場、仕事」)、「子育てを通して」(以下、「子育て」)、「近所づきあいを通して」(以下、「近所づきあい」)、「町内会、自治会を通して」(以下、「町内会、自治会」)、「趣味、習い事を通して」(以下、「趣味、習い事」)、「ボランティア活動を通して」(以下、「ボランティア活動」)、「その他」のうち一番あてはまるものを1つ選択)、交流頻度(「会う頻度」(以下、「面会頻度」)、「電話をする頻度」(以下、「電話頻度」)、「メールをする頻度」(以下、「メール頻度」)、「手紙を書く頻度」(以下、「手紙頻度」)について、それぞれ「週に1回以上」、「月に1~3回」、「2,3か月に1回」、「年に1~3回」、「ほとんどない」から1つ選択)、会話内容(予備調査の結果をもとに、「趣味のこと」、「健康関連のこと」、「日常のこと」、「これからのこと」、「愚痴」、「家族のこと」、「仕事について」、「社会情勢について」、「過去の体験について」、「その他」の選択肢を設け、あてはまるものすべてを選択)について尋ねた。

また、友人関係の満足度(以下、「友人関係満足度」)について、「まったく満足していない」(1点)から「とても満足している」(10点)までの10件法で回答を求めた。

### (5) 友人関係機能

友人関係機能については、予備調査の結果と先行研究(Connidis & Davies, 1992; 前田, 2004; 西村他, 2000; 丹野・松井, 2006)を参考に、「交遊活動」

「情緒的・手段的支持」、「相互理解」の3つの機能を想定し、項目を作成した。使用した項目は、「気軽なおしゃべりを楽しむ」、「趣味や娯楽をいっしょに楽しむ」、「心配事や悩み事を相談し合える」、「互いの能力や努力を認め合う」、「共通の体験について話せる」、「価値観や考え方が似ている」、「お互いに理解し合える」、「精神的に支え合える」、「安心感が得られる」、「エネルギーがわく」、「ちょっとした用事を頼んだり、頼まれたりする」、「これからも長くつき合っていきたい」の12項目で、「はい」(3点)、「どちらともいえない」(2点)、「いいえ」(1点)の3件法で回答を求めた。

## 3. 倫理的配慮

各調査協力者に配付した質問紙に、研究の主旨、倫理的配慮について説明した文書を添付した。著者が直接調査への協力を依頼し、質問紙を配付した調査協力者に対しては、口頭および文書で説明を行った。説明の中には、調査の目的、調査結果を研究の目的以外に使用することはないこと、得られたデータは個人が特定されない形にして処理、分析し、研究が終了した時点で消去、破棄すること、調査への参加は任意であり、回答したくない項目は空欄のままでもよいこと、本研究に対する問い合わせ先などが含まれている。知人を介して質問紙を回収する際には、回答が他の人に知られることのないように著者が用意した返信用封筒に調査協力者自身に入れてもらい回収した。また、質問紙を郵送で回収する場合には、返送用封筒の差出人は無記名とした。

## 結 果

質問紙が回収できた265名のうち、回答に不備があった24名を除く241名(男性92名、女性149名)を分析の対象とした。統計分析にはSPSSVer. 20およびAMOSVer. 20を使用した。

### 1. 調査協力者の概要

241名の平均年齢は、72.08歳(60~88歳、 $SD=7.07$ )であった。男性は72.03歳(60~88歳、 $SD=7.06$ )、女性は72.11歳(60~88歳、 $SD=7.11$ )で

あり、平均年齢に男女で有意な差はなかった ( $t(239) = -.08, n.s.$ )。

調査協力者の就労状況、家族、居住形態について表1にまとめた。

現在就労している人は、全体では76名(31.5%)、男性では39名(42.4%)、女性では37名(24.8%)であった。就労の有無には、性別による有意な人数の偏りがみられ ( $\chi^2(1) = 8.43, p < .01$ )、男性の方が就労している人の割合が高かった。次に、現在就労していない人について過去の就労状況をみると、男性では、「継続して就労」が42名(84.0%)と最も多かった。一方女性では、「専業主婦(無職)」が53名(49.1%)で最も多く、次いで「継続して就労」が34名(31.5%)、「再就職」が18名(16.7%)であった。

家族については、配偶者がいる人は171名(71.0%)で、男性では83名(90.2%)、女性では88名(59.1%)であった。配偶者の有無には、性別による有意な人数の偏りがあり ( $\chi^2(1) = 27.30, p < .001$ )、男性の方が配偶者がいる人の割合が高かった。子どもがいる人は全体で220名(91.3%)であり、男性では87名(94.6%)、女性では133名(89.3%)の人

に子どもがいた。居住形態については、全体では、「一人暮らし」が42名(17.4%)、「夫婦のみ」が96名(39.8%)、「配偶者および子どもと同居」が45名(18.7%)、「子どもと同居」が36名(14.9%)であった。男性では、「夫婦のみ」が46名(50.0%)、「配偶者および子どもと同居」が24名(26.1%)で、配偶者と同居している人が多く、「一人暮らし」(6名, 6.5%)、「子どもと同居」(8名, 8.7%)は少数であった。女性では、「夫婦のみ」(50名, 33.6%)に次いで「一人暮らし」(36名, 24.2%)が多かった。性別による居住形態に関する人数の偏りは有意であり ( $\chi^2(3) = 22.24, p < .001$ )、男性は女性に比べ「一人暮らし」が少なく、「夫婦のみ」、「配偶者および子どもと同居」が多かった。

暮らし向きについては、「ふつう」と回答した人が135名(56.0%)と最も多く、男女ともに半数以上であり(男性51.1%、女性59.1%)、「ふつう」、「ややゆとりがある」、「ゆとりがある」を合わせた人数は全体では205名(85.12%)、男性80名(86.96%)、女性125名(83.89%)であった。

健康状態については、男女ともに「ふつう」と回答した人が最も多く、全体で133名(55.2%)、男性

表1 調査協力者の就労状況、家族、居住形態

		全体 (n=241)	男性 (n=92)	女性 (n=149)	$\chi^2$ 値 (df)
		人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	
就労状況	現在就労している	76 (31.5)	39 (42.4) $\Delta$ **	37 (24.8) $\nabla$ **	8.43 (1) **
	現在就労していない	158 (65.6)	50 (54.3)	108 (72.5)	
	無回答	7 (2.9)	3 (3.3)	4 (2.7)	
	過去の就労状況 <sup>1)</sup>				
	継続して就労	76 (48.1)	42 (84.0)	34 (31.5)	
	再就職	21 (13.3)	3 (6.0)	18 (16.7)	
	専業主婦(無職)	53 (33.5)	0 (0.0)	53 (49.1)	
	無回答	8 (5.1)	5 (10.0)	3 (2.8)	
家族	配偶者の有無				27.30 (1) ***
	いる	171 (71.0)	83 (90.2) $\Delta$ **	88 (59.1) $\nabla$ **	
	いない	67 (27.8)	8 (8.7)	59 (39.6)	
	無回答	3 (1.2)	1 (1.1)	2 (1.3)	
	子どもの有無				2.11 (1)
いる	220 (91.3)	87 (94.6)	133 (89.3)		
いない	18 (7.5)	4 (4.3)	14 (9.4)		
無回答	3 (1.2)	1 (1.1)	2 (1.3)		
居住形態	一人暮らし	42 (17.4)	6 (6.5) $\nabla$ **	36 (24.2) $\Delta$ **	22.24 (3) ***
	夫婦のみ	96 (39.8)	46 (50.0) $\Delta$ **	50 (33.6) $\nabla$ **	
	配偶者および子どもと同居	45 (18.7)	24 (26.1) $\Delta$ *	21 (14.1) $\nabla$ *	
	子どもと同居	36 (14.9)	8 (8.7) $\nabla$ *	28 (18.8) $\Delta$ *	
	その他	9 (3.7)	2 (2.2)	7 (4.7)	
	無回答	13 (5.4)	6 (6.5)	7 (4.7)	

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

$\Delta$ は残差分析の結果期待度数よりも有意に多いもの、 $\nabla$ は有意に少ないもの

<sup>1)</sup> 現在就労していない人の内訳を示す。

43名(46.7%), 女性90名(60.4%)であった。「ふつう」, 「よい」, 「非常によい」を合わせた人数は全体では214名(88.80%), 男性81名(88.04%), 女性133名(89.26%)であった。

ADL得点の全体の平均は11.96 ( $SD=1.80$ ), 男性11.48 ( $SD=2.20$ ), 女性12.26 ( $SD=1.44$ )であり, ADL得点は高い傾向にあった。性別による平均値の差を検定した結果, ADL得点は, 女性の方が男性より有意に高かった ( $t(139.671)=-3.01, p<.01$ )。

## 2. 主観的幸福感

主観的幸福感得点の全体の平均は12.64 ( $SD=3.61$ ), 男性12.97 ( $SD=3.69$ ), 女性12.44 ( $SD=3.55$ )であり, 主観的幸福感得点には有意な性差はみられなかった ( $t(239)=1.08, n.s.$ )。

## 3. 友人関係の特徴

友人の性別は, 男女とも90%以上の方が同性であった(男性: 81名, 93.1%, 女性: 142名, 97.3%)。

友人の平均年齢は, 70.40歳(45~90歳,  $SD=7.75$ ), 男性では70.85歳(45~90歳,  $SD=7.63$ ), 女性では70.12歳(48~86歳,  $SD=7.83$ )であった。友人の平均年齢に有意な性差はみられなかった ( $t(231)=.70, n.s.$ )。また, 調査協力者の年齢と友人の年齢の相関係数を算出したところ, 男性では有意な強い正の相関が, 女性では有意な中程度の正の相関がみられた(男性:  $r=.82, p<.01$ , 女性:  $r=.68, p<.01$ )。

友人との交際期間の平均は33.70年(2~80年)であり, 男性では39.78年(5~80年), 女性では30.14年(2~71年),  $SD$ は18.27(男性18.07, 女性17.84)であった。性別による交際期間の平均値の差を検定した結果, 男性の方が女性より有意に長かった ( $t(220)=3.92, p<.001$ )。

友人と知り合ったきっかけについて表2に示した。男性では「職場・仕事」が41.6%で最も多く, 女性では「趣味・習い事」が31.8%と最も多かった。知り合ったきっかけのカテゴリーについて, 「幼なじみ」, 「学校」を『幼少』, 「職場・仕事」を『仕事』, 「子育て」, 「近所づきあい」, 「町内会・自治会」を

表2 友人と知り合ったきっかけ

	全体(n=206)		男性(n=77)		女性(n=129)		カテゴリー合併
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
幼なじみ	17	(8.3)	7	(9.1)	10	(7.8)	幼少
学校	39	(18.9)	21	(27.3)	18	(14.0)	
職場・仕事	56	(27.2)	32	(41.6)	24	(18.6)	仕事
子育て	11	(5.3)	0	(0.0)	11	(8.5)	地縁
近所づきあい	19	(9.2)	2	(2.6)	17	(13.2)	
町内会, 自治会	4	(1.9)	3	(3.9)	1	(0.8)	
趣味, 習い事	51	(24.8)	10	(13.0)	41	(31.8)	趣味活動
ボランティア活動	9	(4.4)	2	(2.6)	7	(5.4)	

表3 友人と知り合ったきっかけ(カテゴリー合併)

	全体(n=206)		男性(n=77)		女性(n=129)		$\chi^2$ 値(df)
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
幼少	56	(27.2)	28	(36.4) $\Delta^*$	28	(21.7) $\blacktriangledown^*$	28.37(3)***
仕事	56	(27.2)	32	(41.6) $\Delta^{**}$	24	(18.6) $\blacktriangledown^{**}$	
地縁	34	(16.5)	5	(6.5) $\blacktriangledown^{**}$	29	(22.5) $\Delta^*$	
趣味活動	60	(29.1)	12	(15.6) $\blacktriangledown^{**}$	48	(37.2) $\Delta^*$	

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

$\Delta$ は残差分析の結果期待度数よりも有意に多いもの,  $\blacktriangledown$ は有意に少ないもの

『地縁』, 「趣味・習い事」, 「ボランティア活動」を『趣味活動』としてそれぞれまとめた(表3)。その結果, 知り合ったきっかけは, 男性では『仕事』が最も多く, 次いで『幼少』, 『趣味活動』, 『地縁』の順であった。一方, 女性では『趣味活動』が最も多く, 次いで『地縁』, 『幼少』, 『仕事』の順であった。友人と知り合ったきっかけの性別による人数の偏りを検定した結果, 人数の偏りは有意であった( $\chi^2(3)=28.37, p<.001$ )。残差分析より, 男性は女性に比べ『幼少』と『仕事』が多く, 女性は『地縁』と『趣味活動』が多かった。

友人との交流頻度については, 「面会頻度」, 「電話頻度」, 「メール頻度」, 「手紙頻度」それぞれについて「ほとんどない」を『交流なし群』, 「年に1~3回」, 「2, 3か月に1回」を『交流低群』, 「月に1~3回」, 「週に1回以上」を『交流高群』としてまとめた(表4)。その結果, 「面会頻度」は, 男女ともに半数以上が『交流高群』であったが, 「メール頻度」, 「手紙頻度」では『交流なし群』が半数以上であった。それぞれの交流頻度の性別による人数の偏りを検定した結果, 「電話頻度」と「メール頻度」において有意な人数の偏りがみられた(「面会頻度」: Fisher's exact testにより  $n.s.$ , 「電話頻度」:  $\chi^2$ )

表4 友人との交流頻度

		全体 (n=241)	男性 (n=92)	女性 (n=149)	$\chi^2$ 値 (df)	
		人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)		
面会頻度	ほとんどない	交流なし群	7 (2.9)	4 (4.3)	3 (2.0)	— (n.s.) <sup>1)</sup>
	年に1~3回	交流低群	71 (29.5)	33 (35.9)	38 (25.5)	
	2, 3か月に1回	交流高群	163 (67.6)	55 (59.8)	108 (72.5)	
電話頻度	ほとんどない	交流なし群	35 (14.5)	19 (20.7) $\Delta$ *	16 (10.7) $\blacktriangledown$ *	26.15 (2) ***
	年に1~3回	交流低群	60 (24.9)	36 (39.1) $\Delta$ **	24 (16.1) $\blacktriangledown$ **	
	2, 3か月に1回	交流高群	146 (60.6)	37 (40.2) $\blacktriangledown$ **	109 (73.2) $\Delta$ **	
メール頻度	ほとんどない	交流なし群	172 (71.4)	62 (67.4)	110 (73.8)	11.56 (2) **
	年に1~3回	交流低群	17 (7.1)	13 (14.1) $\Delta$ **	4 (2.7) $\blacktriangledown$ **	
	2, 3か月に1回	交流高群	52 (21.6)	17 (18.5)	35 (23.5)	
手紙頻度	ほとんどない	交流なし群	173 (71.8)	68 (73.9)	105 (70.5)	.99 (2)
	年に1~3回	交流低群	56 (23.2)	21 (22.8)	35 (23.5)	
	2, 3か月に1回	交流高群	12 (5.0)	3 (3.3)	9 (6.0)	

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

$\Delta$ は残差分析の結果期待度数よりも有意に多いもの、 $\blacktriangledown$ は有意に少ないもの

1) Fisher's exact test (両側検定)

(2) = 26.15,  $p < .001$ , 「メール頻度」:  $\chi^2(2) = 11.56$ ,  $p < .01$ , 「手紙頻度」:  $\chi^2(2) = .99$ , n.s.)。電話頻度の『交流高群』は女性の方が多く、メール頻度の『交流低群』は男性の方が多かった。

友人との会話内容について、会話内容9項目それぞれについて「する」と回答した人の人数を表5に示す。全体では、「健康関連のこと」が最も多かった(198名, 82.2%)。性別と会話内容に関して、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果、「日常のこと」、「家族のこと」、「社会情勢」、「過去の体験」、「これからのこと」、「愚痴」において有意な人数の偏りがみられた

表5 友人との会話内容(「する」と回答した人の人数)

	全体(n=241)	男性(n=92)	女性(n=149)	$\chi^2$ 値 (df)
	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	
健康関連のこと	198 (82.2)	71 (77.2)	127 (85.2)	2.52 (1)
日常のこと	181 (75.1)	60 (65.2)	123 (82.6)	9.35 (1) **
趣味のこと	169 (70.1)	68 (73.9)	101 (67.8)	1.02 (1)
家族のこと	126 (52.3)	36 (39.1)	90 (60.4)	10.32 (1) **
社会情勢	116 (48.1)	59 (64.1)	58 (38.9)	14.47 (1) ***
過去の体験	100 (41.5)	46 (50.0)	54 (36.2)	4.44 (1) *
これからのこと	90 (37.3)	26 (28.3)	64 (43.0)	5.25 (1) *
愚痴	88 (36.5)	21 (22.8)	67 (45.0)	12.03 (1) **
仕事について	44 (18.3)	18 (19.6)	26 (17.4)	0.71 (1)

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

(「日常のこと」:  $\chi^2(1) = 9.35$ ,  $p < .01$ , 「家族のこと」:  $\chi^2(1) = 10.32$ ,  $p < .01$ , 「社会情勢」:  $\chi^2(1) = 14.47$ ,  $p < .001$ , 「過去の体験」:  $\chi^2(1) = 4.44$ ,  $p < .05$ , 「これからのこと」:  $\chi^2(1) = 5.25$ ,  $p < .05$ , 「愚痴」:  $\chi^2(1) = 12.03$ ,  $p < .01$ )。男性は、女性に比べ「社会情勢」や「過去の体験」について話すことが有意に多く、女性では「日常のこと」、「家族のこと」、「これからのこと」、「愚痴」が有意に多かった。

次に、友人関係満足度についてみる。友人関係満足度の平均は 8.22 (SD=1.87), 男性 8.05 (SD=1.74), 女性 8.32 (SD=1.75) であった。性別による平均値の差を検定した結果、有意な差はみられなかった ( $t(239) = -1.05$ , n.s.)。

#### 4. 友人関係機能

友人関係機能に関する12項目に対して因子分析(主因子法・Promax回転)を行った。十分な因子負荷量を示さなかった1項目(「心配事や悩み事を相談し合える」)を除外した11項目で再度同じ手法の因子分析を行ったところ、固有値の減衰状況、因子の解釈可能性から2因子構造が妥当と考えられた。結

果を表6に示す。第1因子は、相互に理解し合うことや安心感を得るといった項目やサポートに関する項目から構成されていることから「相互理解・サポート」(11項目,  $\alpha=.84$ )と命名した。第2因子は、趣味や娯楽、おしゃべりを楽しむという項目から成り、活動の共有やコミュニケーションに関する内容であることから「交遊活動」(2項目,  $\alpha=.44$ )と命名した。各因子に含まれる項目の平均値を算出し、因子得点とした(表7)。「相互理解・サポート」, 「交遊活動」ともに女性の方が男性より得点が有意に高かった(「相互理解・サポート」:  $t(239)=-2.13, p<.01$ , 「交遊活動」:  $t(164.95)=-2.46, p<.01$ )。

表6 友人関係機能の因子分析結果  
(主因子法・Promax回転後の因子パターン)

項目内容	第1因子 相互理解・ サポート	第2因子 交遊活動
お互いに理解し合える	.80	-.21
安心感が得られる	.75	-.09
エネルギーがわく	.65	.13
互いの能力や努力を認め合う	.62	.11
精神的に支え合える	.59	-.04
価値観や考え方が似ている	.51	.11
共通の体験について話せる	.50	.14
ちょっとした用事を頼んだり、頼まれたりする	.49	.21
これからも長くつき合っていきたい	.43	.01
趣味や娯楽をいっしょに楽しむ	-.06	.75
気軽なおしゃべりを楽しむ	-.01	.43
因子間相関	I	II
I	-	.59
II		-

表7 友人関係機能の因子得点

因子	全体(n=241)	男性(n=92)	女性(n=149)	t値
	平均値(SD)	平均値(SD)	平均値(SD)	
相互理解・サポート	2.68 (.43)	2.61 (.44)	2.73 (.41)	-2.13*
交遊活動	2.77 (.47)	2.67 (.52)	2.83 (.43)	-2.46*

\* $p<.05$

## 5. 友人関係機能および友人関係満足度と主観的幸福感との関連

友人関係機能の2つの因子得点と友人関係満足度, 主観的幸福感得点との関連について, 図1のようなモデルを仮定し, 男女間でモデルに違いがあるかどうかを検討するために, 多母集団同時分析を行った。その結果, モデルの適合度指標は,  $GFI=.980$ ,  $AGFI=.900$ ,  $RMSEA=.079$ であり, モデルとしての適合度は良好と評価した。パラメータ間の差の検定を行ったところ, 有意な差がみられなかったため, 男女込みで共分散構造分析を行った(図1)。適合度指標は,  $GFI=.986$ ,  $AGFI=.932$ ,  $RMSEA=.099$ であり, 一定の水準を確保できたと判断した。友人関係機能の「相互理解・サポート」から友人関係満足度へのパス係数および友人関係満足度から主観的幸福感得点へのパス係数が有意であった(それぞれ  $.37, p<.001$ ;  $.31, p<.001$ )。友人関係満足度が高いほど主観的幸福感が高まり, 友人関係機能の「相互理解・サポート」が友人関係満足度に正の影響をおよぼしていることが示された。

## 考 察

### 1. 調査協力者の概要

今回の調査協力者は, 身体的に健康で生活の自立度が高く, 暮らし向きにはゆとりがあると回答した人が多かった。現在配偶者がいる人は男性が90.2%, 女性が59.1%であり, 一人暮らしの割合は男性が6.5%, 女性が24.2%であった。主観的幸福感, 同じ尺度を用いた先行研究(古谷野, 1982; 杉井・本村, 1992)と比べ, やや高い傾向にあった。先に述べたように, 高齢者の主観的幸福感, 健康, 経

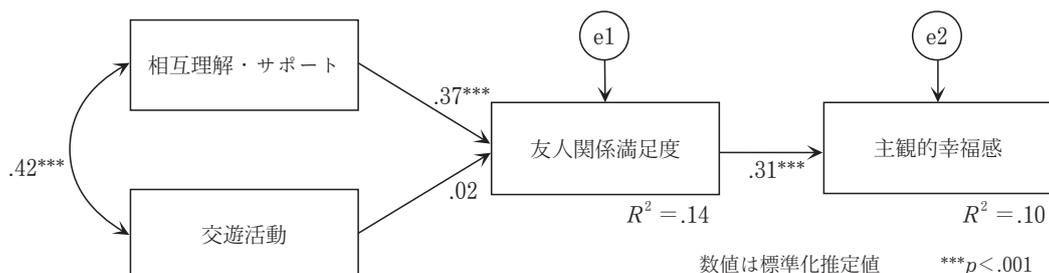


図1 友人関係機能, 友人関係満足度, 主観的幸福感との関連

済状況、配偶者の有無と関連があることが明らかになっており、今回の調査協力者の主観的幸福感が高かったのも、健康で経済状況が良好な人が多かったことが影響しているのではないかと考えられる。また、生活機能の高さや経済状況の良好さは友人の数や他者との交流の有無に正の影響をおよぼしていることが確認されており（小林他，2005；西村他，2000），今回の協力者は、友人関係を形成し維持するための重要な基盤を持っていたと言える。

## 2. 友人関係の特徴

男女とも、多くの人が同年代で同性の友人を親友として挙げていた。友人と知り合ったきっかけは、男性では仕事や学校、女性では趣味や習い事、近所づきあいを通して知り合った人が多かった。交際期間の平均は33.70年であり、男性の方が長かった（男性39.78年，女性30.14年）。男女ともに友人とは頻繁に会っており、メールや手紙のやりとりをしている人は少なかった。電話をする頻度は女性の方が男性より頻繁であった。会話の内容は、男女ともに健康関連のことが最も多く、高齢期の特徴が表れている。男女で違いがみられた会話内容をみると、男性では社会情勢や過去の体験についての話題が多く、女性では家族のことや愚痴、これからのことなど生活に密着した内容が多かった。高齢者が家族以外の他者や友人と知り合うきっかけには、男女で違いがみられ、男性では仕事や学校、女性では趣味や近隣関係が多いということが、これまでも報告されてきた（前田，2004；小田，2003；和田，2012；矢部・西村・浅川・安藤・古谷野，2002）。本研究においても同様の結果となり、交際年数、会話内容の性差には、知り合ったきっかけが影響していると考えられる。前田（2004）は、友人関係形成の男女による違いについて、ライフコースのジェンダー差という観点から考察している。女性は、成人期以降、仕事や家事、子育てなど様々な役割を担うことが多く、ライフステージによる役割移行や生活環境の変化を経験する。そのため、友人関係を形成する過程も多様になる半面、その時々々の生活状況に応じた友人関係を形成するため、関係が継続されないこともあると考えられ

る。一方、男性は継続して就労するケースが多く、定年退職を迎えるまでは、ライフステージによる環境の変化が女性に比べれば少ない。したがって、男性では幼なじみや学生時代からの友人、仕事を通して知り合った友人が多かったのに対し、女性では地縁や趣味、習い事などの活動を通して知り合った友人が多かったと考えられる。

## 3. 友人関係機能

友人関係機能は、因子分析の結果、2因子構造であると考えられ、それらは、相互理解やサポートに関する機能とおしゃべりや余暇活動への同伴など交遊活動に関する機能であった。各機能に含まれた項目の内容をみると、我々があらかじめ想定していた「交遊活動」、「情緒的・手段的サポート」、「相互理解」の3つの機能のうち、「情緒的・手段的サポート」と「相互理解」に関する内容が1つの因子としてまとまる結果となった。今回抽出された2つの機能（「相互理解・サポート」、「交遊活動」）は、Connidis and Davies（1992）の「Confidants」と「Companions」に相当する機能であると言える。先に述べたように高齢者におけるサポート機能は主に家族が担っていること、特に男性においては、サポート源が配偶者に集中する傾向にあることを考えると、今回の調査協力者の半数以上に配偶者がおり、特に男性の9割に配偶者がいたことは、友人関係におけるサポート機能を相対的に低めることにつながったのではないかと考えられる。同時に、問題部分で述べたようにこれまでの研究（小林他，2005；西村他，2000；野邊，2005）から、友人は、情緒的サポートにおいては家族よりも重要な位置を占めており、今回の「相互理解・サポート」機能は、情緒的サポートに近い機能と考えることもできる。また、両機能とも女性の方が高かった。このことは、女性は男性よりもより多面的な社会的ネットワークを築いていることを示唆したこれまでの研究（西村他，2000；前田，2004）と重なる結果である。

ところで、丹野・松井（2006）は、問題部分で述べたように高齢者のHI友人とLI友人における友人関係機能の検討に先立ち、大学生を対象にHI友

人とLI友人の性差について分析している。我々の調査協力者の友人関係は交流頻度が高かったことから、丹野・松井（2006）のHI友人（ふだんからよく会う親密な友人）に相当すると言える。丹野・松井（2006）によると、大学生のHI友人においては、男性では「遊び仲間」と「ライバル」、女性では「遊び仲間」と「気軽に支援しあえる・相談相手」が主な機能を果たしていた。本研究の結果と照らし合わせると、青年期、高齢期いずれのライフステージにおいても、「交遊活動」は、友人関係の主要な機能であるということが言える。一方、本研究では、「相互理解・サポート」機能が見出されたが、丹野・松井（2006）は、大学生においては「相互理解」や価値観や考え方が似ているという「類似性」については、ふだんの生活では意識されにくい友人関係機能であると報告している。今回抽出された「相互理解・サポート」機能は、友人との価値観や考え方の類似性を自覚し、共通の体験について話をするなどして、相互に理解し合う機能であり、このような機能は、高齢期になって、より強く意識される友人関係機能であることが示唆された。このことは、高齢期の友人関係が、それまでのお互いの人生経験の蓄積の上に築かれてきた関係であることが影響していると考えられる。Allan（1989 仲村他訳 1993）は、長年にわたる友人は、「互いの経験を確認し、その個性の意義を認め合うことによって高齢になっても意味と連続性を提供し」アイデンティティの感覚を保持してくれる存在であると述べている。「相互理解・サポート」機能は、高齢者にとってアイデンティティ保持の機能も果たしていることが推察される。

#### 4. 友人関係機能、友人関係満足度と主観的幸福感との関連

男女ともに友人関係に満足している人ほど、主観的幸福感が高いことが示され、予測通りの結果であった。さらに、男女とも友人関係機能のうち「相互理解・サポート」が高いほど友人関係の満足度が高いことがわかった。上述したように、「相互理解・サポート」機能は、友人との情緒的なサポートの授受や、自身のアイデンティティの再確認に関わる機

能も有していることが推察され、このような機能が得られる友人関係ほどその関係性への満足度は高まり、そのような友人関係を築くことが主観的幸福感を高めることにつながるということが明らかになった。

#### 5. 今後の課題

本研究の調査協力者は、主に趣味のサークルなど社会的活動の場を通して調査に協力してくれた人たちであった。したがって、交友関係に積極的で、良好な友人関係を築いている人が多かったと言える。交友関係の様相は、生活環境の違いによって異なってくるのが予想されるため、これらの結果は、今回の調査協力者の特徴を前提に解釈する必要がある。

高齢期は、加齢による健康や生活状況の変化が著しい時期である。今回は、性差の検討を中心としたため、年代別の検討は行っていないが、今後、調査の規模を広げて、年代別の検討を行うことも必要であろう。さらに年代による違いだけでなく、世代による違いも視野に入れなければならない。例えば、今回示唆された友人関係のジェンダー差は、社会変動に伴い次世代以降の高齢者では異なる結果となるかもしれない。

本研究では、最も親密な友人との関係性を検討するために、一番親しいと感じている友人との関係について調査したが、今回挙げてもらった親友以外の友人や身近な知人からも心理的適応につながる影響を受けていると考えられる。親友一人に絞らず、身近な他者とのつながりが高齢期の心理的適応に果たす役割について検討することも必要かもしれない。また、友人関係の特徴は個人差が大きいと考えられるため、友人関係の変遷や友人の役割について、量的方法だけでなく質的な研究方法による検討も大事であろう。

#### 文 献

- Allan, G. (1989). *Friendship: Developing a Sociological Perspective*. London: Harvester Wheatsheaf. (アラン, G. 仲村祥一・細辻恵子 (訳) (1993). 友情の社会学 世界思想社)
- 浅川達人・古谷野亘・安藤孝敏・児玉好信 (1999). 高齢

- 者の社会関係の構造と量 老年社会科学, 21, 329-338.
- Connidis, I. A., & Davies, L. (1992). Confidants and Companions: Choices in Later Life. *Journal of Gerontology*, 47, 115-122.
- 平野順子 (1998). 都市居住高齢者のソーシャルサポート授受—家族類型別モラルへの影響— 家族社会学研究, 10, 95-110.
- 藺牟田洋美 (2008). 情動・感情と幸福感 権藤恭之 (編) 朝倉心理学講座 15 高齢者心理学 朝倉書店 pp. 117-133.
- 小林江里香・杉原陽子・深谷太郎・秋山弘子・Jersey Liang (2005). 配偶者の有無と子どもとの距離が高齢者の友人・近隣ネットワークの構造・機能に及ぼす効果 老年社会科学, 26, 438-450.
- 古谷野亘 (1982). モラル・スケール, 生活満足度尺度および幸福度尺度の共通次元と尺度間の関連性 老年社会科学, 4, 142-154.
- 古谷野亘 (2003). サクセスフル・エイジング 古谷野亘・安藤孝敏 (編著) 改訂・新社会老年学—シニアライフのゆくえ— ワールドプランニング pp. 139-162.
- 古谷野亘 (2008). 高齢期の社会関係—日本の高齢者についての最近の研究— 聖学院大学論叢, 21, 191-200.
- 古谷野亘・柴田博・中里克治・芳賀博・須山靖男 (1987). 地域老人における活動能力の測定—老研式活動能力指標の開発— 日本公衆衛生雑誌, 34, 109-114.
- Lawton, M. P. (1975). The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A Revision. *Journal of Gerontology*, 30, 85-89.
- 前田大作・浅野仁・谷口和江 (1979). 老人の主観的幸福感の研究—モラル・スケールによる測定の試み— 社会老年学, 11, 15-31.
- 前田尚子 (2004). 友人関係のジェンダー差—ライフコースの視点から— 老年社会科学, 26, 320-329.
- 内閣府 (2012). 平成 24 年版高齢社会白書
- 西村昌記・石橋智昭・山田ゆかり・古谷野亘 (2000). 高齢期における親しい関係—「交遊」「相談」「信頼」の対象としての他者の選択— 老年社会科学, 22, 367-374.
- 野邊政雄 (2005). 地方小都市に住む高齢女性の社会関係における階層的補完性 社会心理学研究, 21, 116-132.
- 野邊政雄・大須賀翼 (2010). 日本における高齢者の友人関係に関する研究動向 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 145, 53-58.
- 小田利勝 (2003). 都市高齢者の友人関係に関する一考察 神戸大学発達科学部研究紀要, 10, 183-194.
- 佐藤眞一 (2007). 高齢期のサクセスフル・エイジングと生きがい 谷口幸一・佐藤眞一 (編著) エイジング心理学—老いについての理解と支援— 北大路書房 pp. 37-52.
- 菅原育子 (2007). 中年期・高齢期の発達 児童心理学の進歩, 46, 143-170.
- 杉井潤子・本村汎 (1992). 高齢者の主観的幸福感をめぐ—研究— 家族システムの構造的要因との関連において— 家族社会学研究, 4, 53-65.
- 丹野宏昭 (2010). 高齢者の QOL に果たす友人関係機能の検討 対人社会心理学研究, 10, 125-129
- 丹野宏昭・松井豊 (2006). 大学生における友人関係機能の探索的検討 筑波大学心理学研究, 32, 21-30
- 和田実 (2012). 高齢者の同性友人関係の性差—現実, 期待, そのズレと主観的幸福感の関連— 老年社会科学, 34, 16-28.
- 矢部拓也・西村昌記・浅川達人・安藤孝敏・古谷野亘 (2002). 都市男性高齢者における社会関係の形成—「知り合ったきっかけ」と「その後の経過」— 老年社会科学, 24, 319-326.

#### 謝 辞

本調査にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

#### 付 記

本論文は、第一著者が昭和女子大学大学院生活機構研究科に提出した修士論文 (2009 年度) がもとになっている。今回、新たな分析を追加し、再構成した。

(やまおか もも 全国療育相談センター)

(まつなが しのぶ 心理学科)